5 生　活　科

川崎一朗・佐和真由美

1　生活科でめざす自立とは

生活科の教科目標は，次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ，自立への基礎を養う。

この目標を受けて，子どもたちの「自立」を考えるとき，次の３つの側面からとらえることができよう。

(1)生活上の自立　(2)精神上の自立　(3)学習上の自立

具体的には

① 学級や学校という集団や社会の一員として集団生活ができる。
② 自分のことは自分ですることができる。
③ 日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができる。
④ 学習活動や集団生活において自分の考えや意見をはっきりと述べたり，自分の意志を人に伝えたりすることができる。
⑤ 人の話をきちんと聞き，自分の考えを深めることができる。

ということに置き換えて考えることができる。

2　本校生活科でめざす子どもの姿

自立という観点から，本校でめざす子ども像をあげてみる。

(1) 具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども
(2) 自分で見つけた問題について，自分なりに解決する方法を考えたり，試したりする子ども
(3) 自分で気づいたり感じたりしたことを豊かに表現する子ども
(4) 自分なりの考えをもち，考えに基づいて，判断したり，決定したりすることのできる子ども
(5) 自分や友達のしたこと（していること）をふりかえる子ども
(6) 生活科で活動したことを基に，自分の生活を自分で豊かにしよう，工夫しようとする子ども

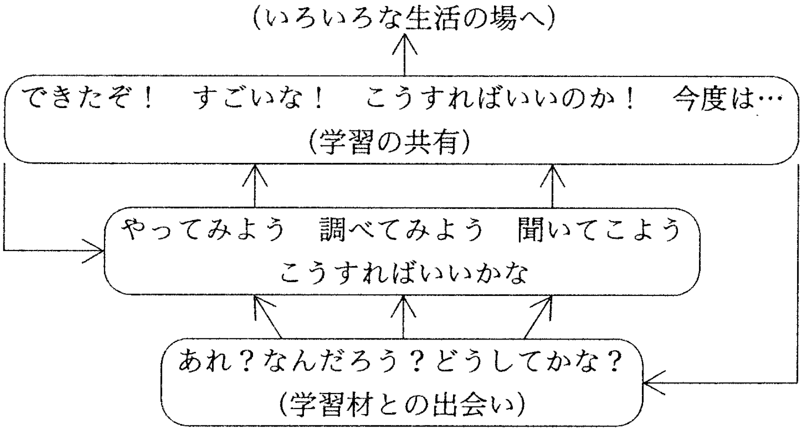
これまでの本校の一連の研究（「個が生きる授業の創造1988～1990」「個が生きる授業の評価1991～1993」「感性を育む1994～1996」）の中で上記(1)(2)(3)(5)における成果がみられた。

今後は，(4)(6)に焦点をあてて，問題解決的な学習過程のさまざまな場面で，子どもたちが自ら考え，決定し，さらに工夫して活動していけるように実践研究を進めていきたい。

3　生活科における具体的な活動や体験とは

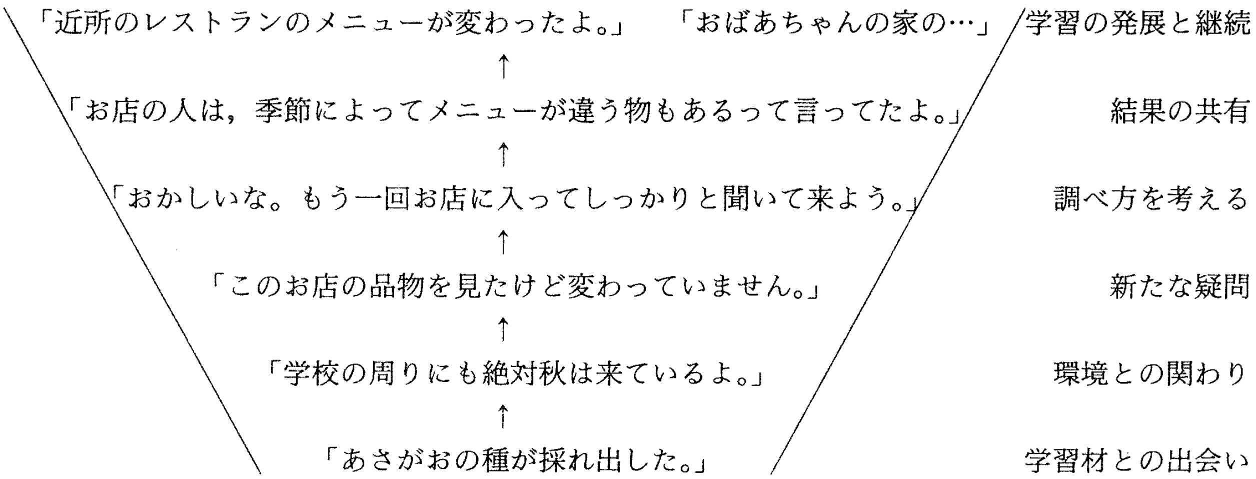
生活科における具体的な活動や体験は，結果を得るための単なる方法や手段ではない。それは，学習の内容であり，方法であるとともに，目標でもある。単に良い結果だけを求めるのではなく，結果に至る過程を大切にしていきたい。それは，子どもたちが学習材と出会い，試行錯誤を重ねる過程の中にこそ，子どもたちのさまざまな工夫や気づきが見られるからである。そして，この過程でそれぞれの活動が絡まり合い刺激し合うことで，子どもたちは，自ら考えを発展させたり活動の

仕方を選択したりしていけると言えよう。こうした活動や体験を積み重ねていけば，その時々で充実感や有用感を味わうことができ，どのような結果でもそれをバネとして次への活動へ挑戦していこうとするであろう。こうして，子どもたちが，生活科からあらゆる生活の場へ活動を発展させていくことが，子ども自身の生活を豊かにしていくことにつながると考える。一連の学習活動の流れは，次のようなものが考えられる。



左の図のように問題解決的な学習活動を進める時，子どもが自ら考え判断し，自分なりに見通しをもって活動でるようにするために子どもに応じた支援・評価を常に心がけていきたい。

4　具体的な授業の中で



5　総合的な学習との関連

総合的な学習は，「人とのかかわり」「もの（自然）とのかかわり」を通して，自分をみがき高めることをねらっており，生活科の学習を発展させていくものになっている。そこで，低学年では問題解決的な活動の過程を大切にして，総合的な学習との関連を図り，ゆったりと考えたり活動に没頭したりする時間を十分に取りたい。そのためにも，学習を進めていきながら年間指導計画の見直しを図っていきたい。

子どもたちが「私はこうしたい。」という思いをもち，自分なりに試行錯誤を繰り返していく中で，さまざまな発見をし，活動の楽しさを味わい，次々と活動を発展させていけるように実践をしていきたい。